

ディヤコニア



説教

絶えず祈り

祈り続けなさい

牧師 佐藤 千郎

イエスは、気を落とさず絶えず祈らなければならぬことを教えるために、弟子たちにたとえを話された。「ある町に、神を畏れず人を人とも思わない裁判官がいた。ところが、その町に一人のやもめがいて、裁判官のところに来ては、『相手を裁いて、わたしを守ってください』と言っていた。

裁判官は、しばらくの間は取り合おうとしなかった。しかし、その後考えた。『自分は神など畏れないし、人を人とも思わない。しかし、あのやもめは、うるさくてかなわないから、彼女のために裁判をしてやろう。さもないと、ひっきりなしにやって来て、さんざんな目に遭わすにちがいない。』」

(ルカによる福音書一八章一―八節)

主イエスの弟子たちは気落ちしていました。落胆していたのです。主イエスが改めて祈りについて教えなければならぬ

いほど落胆していたのです。弟子たちの落胆は、主イエスのお姿が見えなくなつたからではありません。主イエスと共にあつたその日常の中で、弟子たちは気落ちしていたのです。だからこそ、まず心にとめておきたいこと、それは、祈りが落胆へと繋がるその現実、信仰生活の日常で起こりうることで、現に起こっていることだということです。信仰者を襲う落胆は主イエスの傍らで生まれるのです。主イエスは、このような弟子たちに、気を落とさず絶えず祈り、祈り続けなければならぬことを教えるために、口を開かれたのです。

お話しされた「たとえ」に登場したのは、やもめと裁判官です。

イエスの時代、やもめは権力者らに虫けらのように扱われ、彼らの都合がよいように利用され利用価値がなくなると捨てられ、彼らの犠牲となつていく弱人たちの象徴だった、と言われています。

「この最も小さい者の一人」という主イエスのお言葉を連想させます。

裁判官については、神を畏れず人を人とも思わない人、しかも不正な裁判官と言われています。やもめは、こんな裁判官のところへ行つて「お願いします」と繰り返し頭を下げなければならぬかつたのです。不正な裁判官であることを承知していても、生き延びていくためには頭を下げ、この裁判官にすがりついていく他ないやもめの姿は、社会的弱者と言われている人たちの現実にはかなりません。やもめに対して、何度も繰り返されたであろう、不正な裁判官の横柄でけんもほろろな対応は、幾度、やもめを気落ちさせたことでしょうか。それでも、やもめはこの裁判官に頼つていかにざるを得なかつたのです。いつの時代にもみられる社会的弱者の哀しい現実です。

時代劇であれば、権力者の目に余る横暴が頂点に達した時、(水戸黄門のように)日頃は正体を隠している正義の將軍などが出てきて、悪事を暴き、悪人を成敗し、弱い人たちには平穏な暮らしが戻ってくる…という展開が期待されます。

しかし、「たとえ」はそのようには展開せず、願い続けるやもめの行動によってやがて裁判官が態度を変えていくという内容、筋書きになっています。

なぜ、主イエスはこれほどまでに、やもめの行動にこだわられたのでしょうか。それは、やもめにとって、たとえ不正な裁判官であつたとしても、この人以外頼る人がない、その追い詰められた状態こそが、祈りの生まれる場所だつたからです。言葉を変えていえば、「最も小さい者の一人」とともに神がいて下さるその真実が、この追い詰められた状態を、祈りが生まれる場所としていつたのです。

主イエスは、この「たとえ」を通して、祈りの力に信頼して生き続けることの大切さを、気落ちした弟子たちに教えておられるのですが、そこに読み取れるメッセージは、より小さく弱い者の中に宿る祈りが、そして、彼らの弱さを重荷として共に担っている群れの祈りが、より大きく強いものの在り方を根底から揺り動

かし、これまで支配していた社会のルールを変えていくのだということです。

より小さく弱い者と、彼らと祈りを共にしている群れとが、より大きく強いものが支配する世界の中でおも気を落とさず、絶えず祈り続けなければならぬことの理由が、ここにあります。

パウロの言葉に、「わたしたちは、四方から苦しめられても行き詰まらず、途方に暮れても失望せず、虐げられても見捨てられず、打倒されても滅ぼされない。」(コリントの信徒への手紙二四章八〜九節)とあります。また、同じ手紙の中で「すると主は『わたしの恵はあなたに十分である。力は弱さの中でこそ十分に発揮されるのだ』といわれました。だから、キリストの力がわたしに宿るように、むしろ大いに喜んで自分の弱さを誇りましょう。(中略)なぜなら、わたしは弱いときにこそ強いからです。」(同上、十二章九〜一〇)と、弱さに悩み祈り続けた人生を振り返っています。行き詰まりを経験し、落胆を重ねながらも、祈りに支

えられた日々を生き抜いてこそ、言葉にできた信仰者の姿です。

「わたしたち強い者が、強くない者の弱さを担って」(ローマの信徒への手紙一五章一節)こそ、開かれていく未来があります。わたしたちの神は、「わたしの兄弟であるこの最も小さい者の一人」に宿る神であり、弱さを通してご自身の力をあらわにされる神であるからです。

わたしたちは、祈りの果てに、行き詰ります、途方にくれます、虐げられ、打倒される時もあります。そんな時、イエスの弟子たちと同じように気落ちします。しかし、そのような私たちに、主イエスは氣を落とさずに絶えず折れ、と言われます。わたしたちを見放すことも見捨てることがなく共にいてくださる神は、祈りと共にいてくださる神であり、祈りを通して力を発揮される神だからです。

「ベテスタ奉仕父母の家」に連なるわたしたちの希望の基もまた、祈りを通して届けられる神の力にあります。

ディアコニアの原点⑥

召命と献身

ひとつぶの麦が、地におちて死ななければ、それはただ一粒である。

—— ヨハネ 12・24

この、あまりにも真実なことは、この1800年の人類の歴史のなかで幾億たび輝かしく説かれ、また愛誦されたことであろう！ ひとつぶの麦が、それ自身の美しさと完さ、またそれ自身の悦楽に執着しておわるか、または、さらに大きな本来の使命と意義とにしたがって、地におち隠れ、そこからのみやがて実るべき豊かな収穫を期待するか——この間の区別は、かならずしも人間の理性にとつて難解なものではない。

しかし、いったい、これをきき、これを愛誦した人々の幾パーセントが、そのごとく自己の道を決断したであろうか——これを思うときに、人間がちいさな自己に執着する力が如何に強いものであ

るかを知るのである。

先ず、おおくの人々は、自己の死によつて来る祝福と結実の道のあることだに知らない。人間として生きる道は、その己我が執着して生きる道のほかありえないと思っている。人間が、その造られた本来の使命と意義とにしたがって生きる、それは地におちて死ぬることであつて、そこに真の生命があるということだと認めない。ましてや、これを教えられて、そのごとく自己の道を決断するといふことは難事である。



牢にいたときに訪ね

この人生最難の決断を、年若い姉妹がなしうるのは、特別に自分にむけられた鋭い召命をきいたからである。召命という言葉は、しばしば召命の幻覚と混同されやすいが、人によって幻覚をもつて召

命されるものあり、人によって幻覚によらずして召命されるものあり、かならずしも幻覚は重大な要素ではない。重大なことは、天秤計の一方にのせられていた自己追求よりも、他方にのせられた奉仕への召命のほうが、より重くなつてしまったということであろう。

人生の諸所に醜く露呈している悲惨——これを見ても見ぬふりをしつつ、何時の日かそれに仕える機会もあらうと考へて時をすごしてきた、それが急速に自己のうえに重くのしかかつてきて、いかに拒否しても拒否しきれぬものとなり、その前に自己の一切の悦楽と幸福は色あせたものと見えはじめたということ、これが〈召命〉という言葉の具体的な内容でなければならぬ。

しかし、召されたものが必ずしもことごとく選ばれるものではない（マタイ 22・14）。この強烈な召命をして我がうち力をふるうべく許容するところのものは献身である。イエスが（御心に叶うもの）を召したもうた（マルコ 3・13）というときに、彼は、入学選抜や就職試

験のように、優れた才能をもつものを好んだということではない。この（御心に叶う）とは、具体的に言うならば（御側におく）ということ、即ち24時間を捧げつくすことのできるもののことである。

たとえ、鋭い名指しと召命をきいたとしても、その持てるものの多きがゆえに、召したもうものに従いぬものは、神の国にふさわしいものではない（マタイ19:16）。献身とは、ほかならぬ空の器をさしだすことである。ビンがほしいというときに、まだ少し上等の醤油がはいっているが、すてるのも惜しいから、何かのときの役にたとうとおもって、入ったままで提供されるというのは愚である。それが純正のゴマ油であるとか愛蔵の香油であるとかいうにいたっては、一滴ものこりなく捨て、苛性ソーダでよく洗って、清水でよく濯ぎ、なんの残り香もないようにして持ってきてもらいたい。

我々は、何を持って献身するかではなく、何をすてて献身するかを問題としているのである。人間が奉仕に役立つかと

うかは、その人の持てる者にはよらず、彼女がいかに空しく謙虚であるかによるからである。仕えるものは体ではなく心だからである。

かくして、神はよび人これにこたえて、ここに誓約がなりたとうとしている。願わくば、この誓約が真実なものであり、また常にその誓約の真実にたちかえって生涯が神と人とのまにに真実なものとなるように。

いちおう、自然にさからうごとくみえ

14 ぜんちはさけびぬ DIE GANZE WELT Köln, 1623

ぜんちはさけびぬハレルヤハレルヤ
主イエスのいのちにハレルヤハレルヤ

- 1 ぜんちは さけびぬ ハレルヤ ハレルヤ
主イエスのいのちに ハレルヤ ハレルヤ
- 2 てんしは うたいぬ ハレルヤ ハレルヤ
みこ よみがえりぬ ハレルヤ ハレルヤ
- 3 みどりも さやかに ハレルヤ ハレルヤ
いのちに あふれて ハレルヤ ハレルヤ
- 4 ことりも さえずる ハレルヤ ハレルヤ
のやまも こだまに ハレルヤ ハレルヤ
- 5 きよけき ひかりに ハレルヤ ハレルヤ
すべては あたらし ハレルヤ ハレルヤ
(深津 文雄 訳)

る、ひとつぶの麦のいたいたしい死も、そのことをとおしてのみ結実しうる豊かな御国の収穫を信ずるときに、ごく自然なこととして受けとりうる。

我らの先頭にみずから立ち、この真理を見いで、この真理を語り、この真理を生き、この真理によって最大の祝福となりたもうた我等の主イエス・キリストのゆえに…。

「ディアコニ」8号

法人の歴史

かにた婦人の村編④

村人の精神の核となっている作業。その作業の営みを辿ると、この村が村人達と職員とそして途方もない多くの人々の無償の労働によって造られていく姿が映像となって蘇る。

最初の大仕事は、市の水道を引くために、山麓に水槽造り。2年目の6月、雨期でもなお水不足。バケツ1杯が、村人1人が使える1日の生活用水。皆でツルハシを握り、掘られたゴロ土、岩などはバケツに入れ、手渡しで、ゾロゾロ崖下の道まで運ぶ。ツルハシ方は交替、交替それでも精根つきはててしまう重労働。来る日も来る日も炎天下の穴掘り仕事は25日続いた。

夏期ワークキャンプが企画され、強力な部隊が送りこまれた。東工大、日女大、早大、日社大、お茶大、社会人となったOB、総勢37名、2週間。千葉大SC、

30名21日間。労働兄弟愛舎（LBF）18名10日間。

まずは宿泊場所の洞窟内の設備から始め、製陶工場建設予定地までの道作り、整地、測量、基礎工事、鉄筋組み立て、基礎コンクリート打ち、ブロック積み。

そして、初めての暑い盛りの稲刈り、もち米150キロ。一方、貯水堰への通路確保の草刈り、新たにた貯水槽への通路掘り、貯水槽内濾過槽造り、ポンプ小屋ブロック積み、及び関係電気工事、管理棟屋上貯水槽サビ落とし及び再塗装。遊ぶ暇もなく汗が流された。

「記録にとどめられる何名といった数の背後に数えきれない思い出がここにある。あの作業棟のあのブロック、曲がりくねってしまつたコンクリートの壁、崖崩れの土砂の始末、山から木を切り出した作業棟、10年来の水不足を補うための水道工事、もう数えきれない。素人の仕事でみてくれは悪くとも、それこそ歴史に刻み込まれた美しさが、あの壁にも、この壁にもある・・・無償の労働によって流された汗の報酬は、『お兄さん、

お姉さん、ゴクロウサマ、また来てね。』と最後に寮生たちの語る言葉に。」

「46段の階段は、プロの職人に比べれば凸凹があり、雨が降ればところどころに水がたまる。壁面も波打っている。しかし私達は、この壁と階段を永遠に記念したい。日に焼けた顔や手足と、ひとつの釜の飯を食べた胃の腑と、全身をもつて隣人に仕えてくれた若者たちの行為に心の底からお礼を言いたい。」

「開拓時代とは、なんとスリルに満ちた物語があつたものだろう。戦争中は軍の食料貯蔵庫にあてられていた洞窟に裸電球をぶら下げ、梯子をかけ、溜まつた泥を地上まで運び上げる作業は大変だつた。その苦しい作業を、少しでも和らげようと、臨時におやつを焼き始めたのが作業7班、製パン工場発足のキッカケ。」
慈善試写会で資金を集め、ワークキャンプの青年たちの力で、製陶工場に次ぎ製菓作業棟が完成。朝食のパン、復活祭のオスターツォフ（三つ編みのドイツ風フルーツ入りパン）と聖夜のケーキ、降誕祭のフルーツケーキ。1970年6月食

堂での礼拝・朝食が始まると同時に自家製パン食が始められ、今に至っている。

同じ年、1年半閉鎖されていた製陶作業班も再開され、作六窯と名づけられた。あらゆる作業からはみ出していた、名前も年齢もわからぬ0さん、粘土の塊で来る日も来る日もお団子づくり。入所した日を誕生日にしてもらった彼女も、現在推定79歳になり今も土をこねている。「お仕事は？」と尋ねられると、「ねんど」。「何を作っているの?」「さら」。誇りをもつてこたえる。

洗濯作業班もこの年始まる。風呂場の掃除、自分で洗濯できない村人の洗濯、各寮のシート洗い。水不足、機械の故障を乗り越えて、今も全員のシート、枕カバー、タオルケット、そしてトイレのお手拭きタオルの洗濯と風呂場の掃除を手掛けている。

かにた農園の最初の収穫物は、さつまい芋。雑木林をワークキャンパーの力を借りて開墾し、畑を作り、野菜を植え、牛を飼い、養豚をはじめた。同時に農耕と畜産の共同作業場を自分たちで建てる。

自家製の牛乳、ヨーグルト、バターが食卓を彩り、生まれた仔牛が降誕祭のビーフシチューに。チーズにも挑戦。豚からはハム、ソーセージ、ベーコンが作られ、食卓を豊かに彩った。

1980年、国有地70,767㎡購入のため、「かにた農園の夢を買いませんか」と国有地買収資金の募集をする。「かにた農園生産品取得権利証」を発行。すでに植えられていた甘夏みかん134本に加え、新たに開墾された果樹園に、1本10万円で購入してもらった温州ミカン、アンズ、梅、クリ、ネーブル、キウイなど13種の果物の苗木が植えられた。5年後から15年間、無農薬の果物を届けるという斬新なプロジェクトだった。

1999年無事に最後の甘夏みかんを株主さんへ送付。現在も、甘夏の収穫時期になると、ボランティアや元農園職員の数も借りて、村中総出でみかん採り。

「売春防止法によって解放され、婦人保護施設に入ったが、そこからさえ弾きだされて、暗い思いでここに来たが、それから20年。いまでは8つの寮に定着し

て、12の作業班で、残存能力をいかになく発揮しています。

更生なんて信じられない——と嘲られながら、酒も煙草もキツパリやめ、汚れた文化からも遠ざかり、広い自然の懷で、ロビンソン・クルーソーのように生きているのです。

この清らかに洗いがった人間を、やさしく受け入れてくれる社会がないところこそ残念なのですが、だからこそ、こういう所が必要だったということでしょうから、あまり復帰にあせることもありません。老人棟をつくり、納骨堂を立て、あくまで防塞をかたくして、気長に生きつづけるつもりです。『この方法にしたがえば、すべての不可能が可能になる』と、見学者たちは舌をまく。その根本にあるものは、ただ一片の信頼なのです。信ずべくもない時に、それを信じてやる——その信頼の貸しこしが、この世界を生んだのです。」 (天良さゝ子)

*参考資料

かにた便1号41号かにた物語

施設だより

エマオ三周年

佐々木 清

エマオも誕生して3年になりました。近隣から通勤してくる利用者さん達も、設置時の申請書に記された通り、少しずつ増加し、今年度当初は、13名その後4月5月と各1名の減少は有りましたが、6月22日から引きこもりがちだった40才の青年の利用が始まり、12名になりました。

5月29日から、安房特別支援学校の高等部3年生3名の実習があり2名と1名に分かれて実施しました。

初めの2名は2年生の時も実習に来ており、今回は実習期間中の5月27日と6月2～3日にバザーが開催されました。

実習ではバザーの準備から始まり、バザー当日の接客では「いらっしゃいませ」と声を出しと言う、お客様の使った袋をたたむ。販売台の上の洋服をきれいにたたんだり、ワゴンの商品整理などを

しました。色々な作業でしたが、落ち着いて実習してゆきました。来年春の利用開始に向けて、進路指導の先生のこれまでの指導や、ご家族の希望、本人の目標など知っておきたいことがあるいろいろ出てきますが、楽しみです。



6月27日
たんぼぽホールで
お祝いの会をしました。

さて、昨年利用者となっているR

さんについて書いてみたいと思います。Rさんは3人兄弟の2番目でダウン症の方です。家族は同居の父母兄弟、近くに住む祖母等。みんなからとても愛されているようです。

言語は、「行った」という言葉の発語は「ツタ」ですし、「楽しかった」も「ツタ」、「食べた」も「ツタ」です。文字にあらわすと、全く同じですが、表情とか、身振り手振りで表現するので、見ていると少しずつ理解出来てきます。

作業中に作業指導の職員を呼ぶときは、「センセツ」と発語出来ます。小さい時から必要に迫られて、先生を呼ぶために「センセツ」と発語出来るようになったのだらうと思います。近所の先輩で発達障害のAさんのことは「チャン」と呼びます。本当は「アツチャン」と呼んでいるのだと思います。唯一名前が呼べるのはSさんです。特別支援学校小学部から高等部まで10年以上、特別支援学校の送迎バスで一緒に登校し、世話好きのSさんにお世話になったのでしよう、はつきりと「〇〇さん」と呼びます。言葉の

指導については、病院の言語指導に小さい時から通ったようですが、「進歩無し」と言われて、言語指導に通うことは止めたようです。お父さん曰く「『ごほん』とか『いや！』とか、必要に迫られれば、何とか分かるような言葉が出てくる」とのこと、時間をかければもう少し言葉も出てくるかな、と思っているところです。

Rさんは、座ったままの作業が好きです。それも部屋の中での作業が好きです。「皆で外へ出てゴミ出しをしよう」と声を掛けてもすぐには立とうとしません。少し顔をしかめて「行きたくない」とのアピール。動くのが嫌いで太りやすい体質の様なので、「ダメ！行くの！」と少し強い調子ではつきりと言います。

指先の力は他の利用者さんに比べて弱いのですが、「出来ない」と思うのではなく、「嫌なことはやらなくても良い」とあきらめるのではなく、出来ること探しの毎日ですが、利用者さんも職員もお互いを信頼し、信じあえるような作業所に、安心して過ごせる「居場所」にしてゆきたいと思います。

最後に現場から、バザーについての報告とお願いです。

バザーは、1977年にかいた婦人の村が『衣料市』として旧安房教育会館で始めて以来、休みなく続けられています。品物を寄付して下さっていた方が高齢になると、若い家族や新しい方からの寄付が届いています。

販売価格は、40年前に比べれば多少高くなっていると思いますが、10年前からはあまり変わっていない様に思います。良いものは高く日常必要な雑貨は安く、おしゃれ用品は高く必需品は安く、少しでも収入になるようにと寄付して下さい。方のお気持ちを考えて、「安ければよい」「どんどん安くしてみんな売ってしまえ」なんてできません。

最近では、村内のバザーだけでなく、近隣自治体主催の販売会やイベントにも参加しています。最初は職員のみで参加していましたが、最近では利用者さんも一緒に参加しています。利用者さんの中には、一般就労を目指している方や、販売店の店員を目指している方もいます。バザー

のときの「いらっしやいませー」とか「ありがとっございませー」の挨拶など一人ひとりの目標は違いますが、利用者さん一人ひとりが活かされ、それぞれの目標に向かって行くことを応援してゆきたいと思います。



バザーは、このバザー会場とたんぼぼホールを使って開催

この事業を続けてゆくためには、皆様からのご寄付が必要です。不要になった品物で構いませんが、「出来ればバザーに出したとき買っていただける品物を」とお願いしています。

(作業所エマオ・施設長)

六月に入り、梅雨の時は高温多湿で生

活のしにくい毎日ですが、自然は「あじ

さいの花」その他の植物の美しさに人間は多くの勇気をいただいています。

しかし、生きていくことは毎日にきびしく、苦しみや病気の苦痛でおこることは、さけられないし嫌なことは次々と押しよせてきます。

私は昨年十一月に花屋さんで買ったポインセチアの新しい方に語りかけながら生きています。

細井 陽子

*

新樹光ふしぎな出会ひ
触れ会いに

頼み得る人に頼むや新樹光

良き人の計らひ嬉れし新樹光

さりげなき優しき言葉新樹光

リハビリや新樹の光ひたに受く

植木 道子

創立52年目のかにた婦人の村が、いま

抱えている緊急かつ切実な問題は、生活

棟の建て替えです。4年ほど前からその必要性が語られはじめ、いよいよ、来年

度の国の予算に取り上げていただけたところとなり、その詰めに入っているところです。大がかりな事業の実現を村人一同、切に祈り願っています。 天羽 道子

緑したたるこの季節、主の恵みの中に

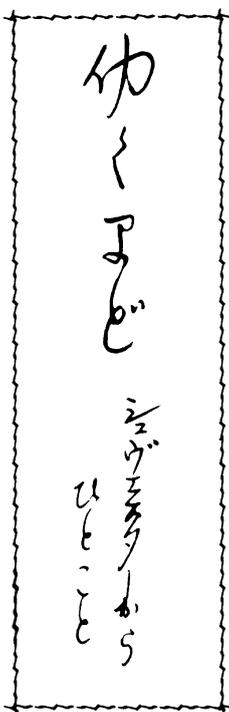
守られて、83歳を迎えました。感謝です。

人並みに多少、足腰の弱くなったことはありますが、日々支えられて過しております。母の家は現在4人の姉妹が暮しています。そのうち2人は、毎週デイケア

で軽い体操の指導を受け、元気に過しています。昼食は隣りのいずみ寮で頂きながら交わりのときをもっています。気候変動の中

皆様の健康をお祈りいたします。 小川 都代

*



去る1月15日、夜半すぎに度々、玄関の呼び鈴を鳴らされ、怖い思いを

去る3月のこと、右肩脱臼で入院手術を受け、退院して2カ月が過ぎました。手厚い介護をうけて日ごとに体力も回復し、お食事もおいしく頂けるようになりました。6月23日のお昼は、かにたから

しました。相談の結果玄関と庭に監視カメラを設置しました。おかげでその後は一度も来ていません。

ミチ姉、塩川姉、天良姉が迎えに来てくださり、久々にレストランで91歳の誕生日を祝って頂きました。

私達も若い頃は夜中でも、何回も対応しましたが、今はもう自分の体も思うようにならず、転んだりしたら、周りの方にご迷惑をおかけする事になると思ひ重しております。

桜庭 歌子

眞山知恵子

2016年度（平成28年度）決算報告書

社会福祉法人ベテスダ奉仕女母の家

勘 定 科 目		決 算 額	
事業活動による収支	収 入	保育事業収入	181,246,116
		就労支援事業収入	17,106,019
		障害福祉サービス等事業収入	15,103,800
		婦人保護事業収入	272,432,538
		借入金利息補助金収入	140,040
		経常経費寄附金収入	55,412,737
		受取利息配当金収入	21,467
		その他の収入	22,617,579
	事業活動収入計 (1)		564,080,296
	支 出	人件費支出	366,375,396
事業費支出		82,166,016	
事務費支出		38,099,734	
就労支援事業支出		17,046,653	
日中作業支出		4,065,845	
支払利息支出		153,355	
その他の支出	11,844,535		
事業活動支出計 (2)		519,751,534	
事業活動資金収支差額 (3)=(1)-(2)		44,328,762	
施設整備等による収支	収 入	施設整備等補助金収入	11,033,000
		施設整備等寄附金収入	7,597,420
		固定資産売却収入	4,804,000
	施設整備等収入計 (4)		23,434,420
	支 出	設備資金借入金元金償還支出	1,644,000
固定資産取得支出		43,492,190	
ファイナンス・リース債務の返済支出		530,064	
施設整備等支出計 (5)		45,666,254	
施設整備等資金収支差額 (6)=(4)-(5)		△ 22,231,834	
その他の活動による収支	収 入	積立資産取崩収入	18,762,524
		その他の活動収入計 (7)	
	支 出	投資有価証券取得支出	3,000
		積立資産支出	4,819,161
	その他の活動支出計 (8)		4,822,161
その他の活動資金収支差額 (9)=(7)-(8)		13,940,363	
当期資金収支差額合計 (11)=(3)+(6)+(9)-(10)		36,037,291	

※ 2016年度事業報告並びに資金収支決算書は、ホームページに公開されています。

賛助金・献金

ありがとうございました

(4～6月分)

柴山 操、酒井 忍、八巻紀子、
広瀬公男、森 史子、菅宮建吉、
今井佳代、五十嵐敏子、嘉陽宗信、
中村由紀子、柴田とよ子、八田満
千子、浅野康子、大嶋喜代子、古
堅順子、田浦教会エレミヤ会、大
柳龍一郎、横田碩子、佐藤元紀、
岡崎節子、三浦恒美、山本道子、
大和キリスト教会支援委員会・丹
羽佳也子、日本基督教団鎌倉雪ノ
下教会、余郷志津子、藤巻契司、
村松一恵、丸山紀久子、西辻郁之、
ベテスタ姉妹会
(敬称略)

第12回定時評議員会 6月17日(土)

於茂呂塾保育園。28年度事業報告並び
に決算報告が承認議決された。

第214回理事会 同日

評議委員会で承認された28年度事業報
告並びに決算報告を承認した。

また、新年度理事(任期2年)をが選
任され、理事長には大沼昭彦が再任さ
れた。本年度より施行された定款によ
り、業務執行理事(理事長先決権の一
部を委任されて行う)として、各施設
長3名が選任された。

★ ベテスタの日のご案内

今年のベテスタの日は、茂呂塾保育園
で開催いたします。職員一同、皆様をお
迎える準備を進めております。どうぞ
お誘い合わせておいでください。

日時・2017年9月23日(土)

秋分の日

11時より15時

場所・茂呂塾保育園

TEL・03-33956125

★ ホームページの更新

2016年度の決算報告等を公開しま
した。法人・各施設の概要の他、「かにか
告知板」「大泉ベテル教会」「ドイツのベ
テスタ・ムッターハウス」の様子も載せ
てあります。また、ディアコニア誌も掲
載されています。是非一度ご覧ください。

★ お詫びと訂正

前号に掲載の法人の振替口座番号が間
違っていました。申し訳ありませんでし
た。正しくは奥付に書いてある通りです。
今後よろしくお願いいたします

★ 評議員会・理事会の議事内容

第213回理事会 6月3日(土)

於茂呂塾保育園。28年度事業報告並び
に決算報告案が承認議決された。

2017年7月15日発行(年3回)

発行人 大沼昭彦

編集人 村田英彦

印刷所 (株)印刷センター

発行所 〒178-0061

東京都練馬区大泉学園町7-17-30

社会福祉法人 ベテスタ奉仕女母の家

<http://www.bethesda-dmh.org/>

振替口座 00190121138164